

## 知事広聴「平太さんと語ろう」記録

【開催日時】平成25年1月18日（金）

10時30分～12時30分

【会場】伊東市観光会館第1会議室

### 1 出席者

- ・ 発言者 熱海市、伊東市において様々な分野で活躍されている方  
6名（男性2名、女性4名）
- ・ 傍聴者 101人

### 2 発言意見

	項 目	頁
発言者 1	NPO法人活動を通じての起雲閣の管理と運営	3
2	定置網漁業の観光資源化 熱海市から伊東市にかけての漁業協同組合の統合 ジオガイド認定ダイバー制度の創設	7
3	まち歩きマップを活用した観光PR	14
4	地域内での共通の価値観の構築と情報発信 教育による郷土愛の育成	16
5	障害者施設の現状とNPO法人の活動紹介 生活が困難な親子が同じ施設で暮らせる制度づくりの要望	25
6	放課後児童クラブの開設に至る経緯 熱海市に住むことの魅力	27
傍聴者 1	ファルマバレー構想の進捗状況	30
2	観光産業のPR	31

<知事挨拶>

今日は本当に美しい晴れ上がった日になりましたが、もう大寒も、たしか20日が大寒ではないかと思えますけれども、大変冷え込みまして寒い中でございますけれども、この広聴会に多数来ていただきましてありがとうございます。

もうこの広聴会というのは35市町、ずっと回っておりまして、これで25回目になります。そして、今回のように伊東と熱海が一緒にするというので、全部回るということになりました。

それ以外に移動知事室というのも昨年始めまして、移動知事室というのは、今日の場合ですとこのまま終わりますと県庁の方に戻るんですけども、戻らない、帰らない、居座るということで、別に知事室が県庁の部屋になくちゃならないということではないということで、県のために仕事をしているので、数日泊まって、朝から晩まで仕事をするというのを昨年始めまして、実は昨年秋にもこちらに参りまして、熱海と伊東を中心に来ておりました。

しかし多くの方にお目にかかってお話を直接承るという機会も、それでもなかなか十分ではありません。そうした中でいつでも来れると思って、と同時にアメリカの人たちが一番大事なところは一番最後に行くというふうに、この間下田に来られたルース大使がそうおっしゃっていらして、47都道府県の中で一番最後に一番良いところをとっておいた、それが静岡県で、そして下田に昨年の5月17日でしたか、あの下田会議に御出席くださいまして、いかに自分がここに来るのを楽しみにしていたかというふうなことを言われておりました。

今日は伊東並びに熱海からそれぞれの地域のリーダーの方たちのお話をじっくり広く聴くと、広聴ということで広く承るということでございます。時間があれば今日お越しくださっておられますフロアーの方々からもお話を承るというふうにして、充実した時間を過ごしてまいりたいと思います。

一つだけ、今日は丹沢が雪降っていますね、北海道や東北地方、日本海側は豪雪です。ですからこちらに来るときに新幹線で来たんですけども、関ヶ原がものすごい雪なので速度を落として運転しておりまして、全体が遅れておりました。そうした中で、もう本当にこのように日照時間に恵まれていると。日照時間は静岡県が全都道府県の中で日本一です。ですから実は太陽の日出ずる国日本のその代表なんですね。太陽の都と言っていいんじゃないですかね。

この伊豆半島は東から来れば入り口が熱海ですけれども、玄関口ですね、そして伊東に入り、各地に行くということになりますけれども、その昔から多くの人々が来られまして、この伊豆についてきれいな表現された方、近代においては川端康成さんがいらっしゃるんですね。ノーベル賞をとられたあの方が『伊豆序説』という短い文章を書かれているんですよ。

そこにこの伊豆は詩の国であるとある人が言う。また日本の歴史の縮図であると。そしてまたある人は、ここは南海のモデルである、南の島からだんだんこちらに来て本州とぶつかったということで、そして海と山の風景の画廊であると。そして伊豆半島全体が一つの大きな公園であるというふうに言われているんですね。もう本当に見事な感性豊かな文化人が伊豆半島全体をとらえて、いかに愛したかということなんですが、今はジオパークというふうに認定されて、これが公園であるということがわかっております。癒しの空間ですね。

ですから冬、みんなが雪の中でうずくまっているときに、こちらはこういう花を楽しめると。1,000種4,000本も植えられているということを知りまして、さすがにこれは花の島だと、あるいは花の都と言っていいというふうにも思う次第でございます。「花の都パリ」というふうに言えますけれども、あれは花のように華やかだという意味で、花がたくさんあるわけじゃありません。

こちらは冬にも、熱海の桜は咲いていますか。（「アタミザクラはもう少しです、あと1週間です」）だから1月中に桜の便りが聞かれるというふうな、2月にはカワヅザクラ、3月には反対側の松崎あたりでオオシマザクラが咲くということでございますね。まさに花の都であるというふうに思います。今日はこの花の都、あるいは太陽の都、あるいは一つの大きな公園であると言われたこの伊豆半島の玄関口、このリーダーの方々からじっくりお話を聞きまして、これを県政に活かしてまいりたいというふうに思っております。どうぞよろしくお願いを申し上げます。（拍手）

<発言者1>

NPO法人あたみオアシス21の理事長を務めておりまして、現在起雲閣の館長を務めております。

実はこのNPO法人あたみオアシス21は平成21年に法人化されまして、その先代ですね、平成7年に熱海市が女性の意見提言を市政に反映したいということで、熱海女性21会

議ということで発足いたしました。市の諮問委員会ということで、女性 21 名による会議がありまして、その中で 1 年を通じて 5 回ぐらい市長さんとの会議を持てる機会がありました。地域の各団体の女性だとか、それから熱海は泉から網代まで地域がありますので、その地域の団体だとかということで、21 名の女性で発足いたしまして、約 10 年間、2 年 1 期ということで 5 期、この 10 年間活動を 21 会議ということでやらせていただきました。

その中で我々も勉強させていただいて、今男女共同参画の時代ですので、その視野を見据えて、平成 7 年に女性の意見をなるべく市政に反映したいということで持たれた会議なんですけれども、女性だけの会議もなかなか時代にそぐわないんじゃないかということで、一生懸命 10 年間活動し、卒業ということで、平成 17 年の 12 月に一応卒業させていただいて、平成 18 年から我々オアシス 21 という会合で独自で活動を進めてまいりました。その後法人格を取らせていただきました。

実はその 10 年間の中でいろいろと我々は経験をさせていただきました。女性の意見提言ということで、なかなか市長さん交えての会議だと、本当にどぶ板会議みたいな感じで、なるべく地域のものをこういうふうにしてほしいとあって、そういうような意見が出てきたんですけれども、我々それではだめだと。自分たちで活動しながら、いろいろと地域を変えていきたいという中で実践をして、いろいろと勉強させていただいて、その中で 2000 年に「伊豆新世紀創造祭」、伊東の皆さんも御存じだと思いますけれども、そういう経験もありましたし、いろんな活動の中で熱海のいろんなものを、我々も地場産品として、もっともっとアピールしていきたいという、熱海は実はダイダイが日本一採れる産地なんです

ね。

そういう中でダイダイのマーマレードの商品化だとか、今は本当に地場産品として熱海のお土産としてダイダイのマーマレードなんかも出てますし、そして今私が起雲閣の館長を務めておりますけれども、平成 10 年ぐらいに起雲閣という旅館が競売物件になってしまったんです。町の中に約 3,000 坪ありまして、そういう中で我々もその当時ちょうど BS テレビの放送で東大の藤森先生が起雲閣の洋館造りというのを 30 分ぐらい放映してくださったんです。

こんなまちの中にこんな時代を経て、大正とか昭和とかの文豪たちが愛したり何かしてきたこの施設が競売物件になってしまう。我々としても残したいなというような中で、市長さんとの会議がありますので、ぜひ残してほしいと。我々募金活動をしてもいいから残してほしいというような、そういうような取組をさせていただきました。

なかなか箱物ですから、市が買っても赤字だとかいろいろなことで大変なことはよく分かっていたんですけども、まちの中の 3,000 坪、本当に大正時代に建てられた建物もすばらしい。そして洋館は根津嘉一郎さんが熱海の別荘として使われていた部分を洋館として建てた棟が 2 棟あるんですね。建築的にどんなに本当に大切なものかということで、講演会だとか、そういうのを活動させていただいた中で、市もそれでは買いましょうということで、平成 12 年の 4 月に熱海市が 12 億という多額なお金を投じていただいて取得をいたしました。

その中で本当に私たちも署名運動させていただいたり何かをした活動の中で、熱海市が取得できたのですけれども、まちを歩くと、箱物よりもっと福祉の方にお金をかけてほしいとか、やっぱりそれぞれ皆さん、その中で活動をなさっている方たちの思いがいろいろあるんですよ。我々もその一員として残してほしいということで活動した中で、本当に責任を感じてしまったんですね。

それではいろんな部分で起雲閣を支えたいということで、開館当初からボランティアというような形で起雲閣の建物の建築的なものの勉強をさせていただいたり何かをして、来ていただくお客様に本当にこの起雲閣のすばらしさを知っていただくような活動をさせていただきました。

その当時は市の有形文化財ということで、市の職員も何人かそこで管理運営をするような形になりましたけれども、遠い将来は多分箱物ですので、指定管理を見据えたことも多分行政サイドの方では検討していったのではないかなと思うんですけども、今は我々熱海女性 21 の会議は女性だけの会員なんですね。今も現在 30 名の会員がおりますけれども、法人格になりましても女性だけの会員ですので、やっぱり本当に経営だとかそういうことも我々も素人ですので、いろいろとやっぱり行政サイドも指定管理を設けるときには、多分心配をしたのではないかなってちょっと思います。

今日御出席いただいた熱海市長さんと、それについて我々本当に何回も話をさせていただいて、そして本当に市長さんが 2 年間、一部管理委託ということでちょっと勉強してみたらどうかというようなことで、起雲閣の職員という感じで 3 人がオアシスから出まして 2 年間、ちょっと市の職員と一緒に管理運営のノウハウをお勉強させていただいたんですね。そしてその中で市長さんがよく頑張ってくださいと。それでは平成 24 年から指定管理を任せましょうというようなことでお話を受けました。

でも多分、議会もあつたり何かをして、これは本当は公募をして指定管理ということを

すればよかったんですけども、あなたたちが開館当初からボランティアという形で支えてきたんだから、文化施設という施設だし、やっぱりそれを大切に思ってくれるそういう気持ちを含めてオアシス 21 に指定管理を任せたいという特随で指定管理をらせていただいたんです。

その中で多分市長さんも議会の中でそれを進める中で、多分大変な思いをなさったと思いますけれども、平成 24 年から指定管理ということで、今は起雲閣女性スタッフ 11 名で管理運営をさせていただいております。本当に私たちも 10 年間で民と官が本当に両立して、両立の歯車でこういう施設が残って、今は年間約 10 万近いお客様が起雲閣に訪れてくださるんですね。

昨年ちょうど 12 年目になるんですけども、12 月の 2 日に 100 万人達成の記念式典をさせていただきました。本当に私も平成 24 年から起雲閣の 5 代目の館長ということで務めさせていただいて、100 万人のお客様を自分たちが管理する中でお迎えをできたということは本当に感無量だったんですね。皆さんに「どうのお気持ちですか」って聞かれると、本当に 10 年間みんなでボランティアとして起雲閣を支えさせていただいて、その御褒美として、このあたまオアシス 21 が管理運営する中で御褒美をいただいたような気がしまして、本当にオアシス全体がよかったねというような話で、楽しく 100 万人のお客様を 12 月 2 日は迎えさせていただきました。

皆さん、起雲閣を御存じでいらっしゃるでしょうか。御見学いただいたという方、もしよろしければ手を挙げていただきたいんですけども。ありがとうございます。結構皆さんお見えいただいていると思います。知事は？

<知事>

会議で。

<発言者 1 >

そうですか。館内は御見学いただいたことが。

<知事>

全部は見ておりません。

<発言者 1 >

そうですか。ぜひまたその機会がありましたら、御見学いただきたいと思います。先日お正月も市長さんがお見えいただいたんですよ。それでお庭も一緒にちょっと御案内させていただいて、鯉も増えたりしましてですね、お話の中で、私、館長という名前ですけれ

ども、何か別荘の管理人みたいなことをしているみたいな感じで、常日頃、やっぱりいろいろとお庭だとか建物だとか、いろんなことがありますので、そういう心配もしながら、起雲閣を訪れてくださるお客様に御案内もさせていただいたり、何かする中で、「あなた館長さん、ここに住んでいるのかね」っておっしゃるお客様もいらっしゃるんですけども、そうじゃないんですよって、ちょっと楽しく、「1、2、3、4、アルソックが管理してくださっているんですよ」っていうようなお話もさせていただきながら、今は本当に日々楽しく管理運営をさせていただいています。

その官から民になった中で、我々本当におもてなしを持って皆さんに接していきたいということで、なるべく声をかけて、お客様の質問にはなるべくお答えをして御案内だとか、そういうような女性ならではの管理運営を今はさせていただいております。実は今回、我々法人格も SBS の傘下のグループになっています伊豆新聞から伊豆賞という御褒美もいただきました。16日にその新聞が一面に出まして、皆さんから「今まで活動してきた結果が報われましたね」というお声をかけていただきました。本当にオアシス全体がうれしいのと、これからやっぱり一生懸命そういうようなものに向かって管理をしていく中で、我々若い人たちにそういう思いのたけをなるべく伝えながら、若い人たちの育成にも努めていきたいなと思っております。

ちょっとまだまだ話し足りないことはたくさんありますけれども、また次回ということでお話しさせていただきたいと思います。初回の本当にとりともなく御紹介をさせていただきましたけれども、また何か御質問があればと思います。どうぞよろしく願いいたします。

#### <発言者2>

よろしく申し上げます。何分漁師なものですから、話は大変不慣れな者ですので、とりとめのない話になると思いますので、その辺よろしく申し上げます。私はまず静岡県の定置網漁業のことと、この熱海、伊東の漁業の現状、また海のジオパークについて話をさせていただきたいと思います。

まず静岡県定置漁業協会というのは、静岡県には大型定置 12 カ統、「カ統」というのは漁協数を表しているんですけども、そのうちの 10 カ統がこの東海岸にあります。熱海から始まって河津町までに 10 カ所の大型定置を日々操業しております。あと駿河湾には由比漁協の沖に 1 カ統、焼津の小川という地域に 1 カ統、それが駿河湾にあります。実質伊豆

半島の東海岸で盛んに行われている漁業です。

近年、この定置網漁業は、私もなかなか漁師をやっているといろんなところに行く機会もなかったんですけども、例えば日本海の氷見というブリで有名なところと比較しますと、私漁協の役員もしているわけですけども、うちが設営している魚市場では、約10カ統の大型定置の水揚げは毎日行われます。これは日本の中でも多分氷見という富山県で有名な地域のその次に匹敵するぐらいの特殊性がある魚市場だと思っております。

この間、組合長を初め、氷見にちょっと行ったわけです。調査に行ったんですけども、氷見ではもう定置網漁業を観光資源として、まさに成功している一例です。それは定置協会、及び伊東漁協で発信しましたところ、県の水産試験場の方で、定置網で採れる魚をどうにか伊豆地区の観光資源にできないかということをご提案しましたら、早速水産試験場の伊豆分場というところで、少しながら日々採れる定置網の魚を観光資源にできないかという、この間も伊東の商工会議所、熱海の商工会議所、あと伊豆の国市の観光協会ですか、この辺にもお邪魔して、漁業者が直接地元にもっと魚を流通させたいという目標を立てて、去年の暮れぐらいから活動しております。

なぜ定置網漁業が観光資源となるかということ、ほぼ毎日水揚げしております。それはもう朝採れなので、例えば朝採れということは、築地には魚は集まりますけど、築地に集まる魚というのは、今日サンマが20トン弱揚がっているんですけども、魚市場に。まず静岡県下の方が、知事にも聞きたいんですけど、静岡でサンマが採れるということを知らないと思うんですね。今日まさに20トン、イカが6トンぐらい採れたんですけども、まず漁業者もそういうことを発信してなかったんです、今まで。去年あたりはブリが35年ぶりに豊漁でした。

よく漁師の言う大漁貧乏という言葉ですけど、ブリが一番の下値というんですけど、一番下に下がったときは150円ぐらいまで下がっております。それが例えば消費者にその金額で出ているかということ、なかなかそれも出てない。安い値段では出てない。それは流通とかいろんな問題もあるとは思いますが、定置網漁業というのはそういう特殊性があります。

あと熱海と、今日熱海の市長さんもいらっしゃっていただいているんですけども、うちの伊東漁協では3年前に網代地区と合併していただいて、熱海と伊東にまたがる漁協を今運営しています。県の指導のもとに熱海の網代市場という大きな市場があるんですけども、それもいわゆる統合するということで、3年前からそういう計画を立てて、この1



月にやっと熱海市さんの協力、静岡県さんの協力で統合できました。

その中でやっぱり熱海でも地元の近海で採れた魚をどうしても熱海地区にも流通させてほしいということで、荷揚げ場という形なんですけれども、今日も熱海の消費者、観光施設なんかにも供給できるようなシステムをつくりまして、熱海にもそのまま、網代地区というのは、熱海の漁業生産の多分 90%ぐらいが網代地区に揚がるものですね、あと大熱海漁協さんというのと初島漁協さん、そこはちょっとまだ合併はしないわけなんですけれども、そのぐらいの生産力を持って、どうしても熱海の地域の人たちに供給したいと、そういう願いがこの1月から始まって、その完成ができました。

また伊東漁協においては、静岡県、伊東市の協力を得まして、去年の6月ですね、骨肉分離機というアメリカ製の加工の機械を入れまして、それはどういう機械かといいますと、例えばサバがあるんですけれども、サバとかイサキというそういうちっちゃい、今までは例えば家庭菜園の肥料とか、養殖の餌にいていたようなちっちゃい流通しない魚を、その骨肉分離機という機械にかけまして、それをすり身にして、骨がない状態でどうにか供給できないかと。私の伊東漁協で6月にそれにトライしたんですけれども、何せ漁師の組織なので、すぐに一般の加工業者さんようにはいかなかったんですけれども、早速伊東市内の学校給食、高齢者施設に供給することができました。またスーパーアオキさんとしてつストアさんなどにもこの半年ぐらいで供給することができました。

例えば骨肉分離機を入れたことによって、早速去年の暮れ、農水省の「お魚の国しあわせプロジェクト」という認定をもらいまして、これは日本の漁協の中では私どもの漁協が一番初めに認定されたものでした。次に続くのは多分由比漁協ぐらいだと思うんです、静岡県では、そういう静岡県、伊東市の協力をもらいまして実現できました。

今までは、これはちょっと言いにくいことかもしれませんが、どうしても静岡県は駿河湾の遠洋カツオとかを非常によく見ていたような感じがするんですが、ここ3、4年は伊豆半島の漁業にも非常にてこ入れをしてくれている現状があります。

まず一つの例としては、水産局長がいらっしゃるんですけれども、その方によって、昨日も私静岡に行く機会がありまして、私が操業しているのは城ヶ崎の富戸港の沖にある定置網なんですけれども、船からスーパーに直接届けると。昨日もセノバという静岡の駅の近くにある売り場をのぞいたんですけれども、もう人だかりができていて、わあ、すごいなど。農業ではよく顔の見える農産物ってあると思うんですけれども、漁業ではなかなかないと思うんですね、生産者が採った。

しずてつストアのその店頭に行きますと、私たち船の乗組員の写真がありまして、今日採ったよと、それもちょうと発信できてやっている。思わず私もその場に行って、きれいな奥さんたちが5、6人いたんでね、「これ私が採ったんですよ」と言って、そこで5、6人に売りましたが、「ああそうなんですか」と言って、気持ちよく買っていってくれましたけれども、そういういろんな取組を静岡県が提案してくれて、それに関わっているのが現状です。

もう1つ、ジオパークについてですけれども、何で漁師がジオパークなんて言うんだと不思議に感じると思うんですけれども、私たち伊東漁協ではダイビング事業というのをおよそ30年ほど前からやっています、海のジオパークを発信させてもらおうと、知事さんの多分発案でジオパークということになったと思うんですけれども、私の地域は城ヶ崎海岸の富戸なんですけれども、うちの漁協が管理している漁場では、川奈、富戸、八幡野で直接ダイビング事業を行っております。そこにはボートダイビングといいまして、ボートで行って潜るところと、ビーチエントリーといいまして、浜から降りてすぐ潜るというのがあります。

その今言った川奈、富戸、八幡野というのは、川奈は御存じのとおり小室山の溶岩流でできた港のような層なんですけれども、私どもの富戸の方に来ると、今度は大室山の溶岩流の流れ、八幡野の方に行くと伊雄山という溶岩流が流れている。まさに溶岩流が流れ込んでいる海だからこそ、ダイバーのお客様がいっぱい来ると。それは地上とちょっと違いまして、丘のことだと、例えば木が生えていたり、土があつたり、工作物があつたりするんですけれども、海は直接溶岩流が流れ込んだ状態を身近で感じることができます。

そういうことで、この伊豆半島のダイビングというのは、大体ダイビングガイドというのがいまして、多分延べなんですけれども、伊東の若いダイビングガイドさんが約150人ぐらいはいると思います。彼らは毎日ネイチャーガイドをやっている、今ジオガイドに認定するという事業をやられているんですけれども、ちょっとサイクルが長くて、ジオガイドをもうちょっと限定的に、例えば海のジオガイドという認定を、もっとハードルを下げてやっていただけないかということをお願いをしたくて言っているんですけれども、というのは、彼たちは毎日お客さんをやっているものですから、例えばそれが何か月にも及ぶジオの研修ってなかなか受けられないですよ。できれば、例えば城ヶ崎地区だけのジオガイドとか、ちょっとトレーニングの期間を短くしていただいて、彼たちにジオガイドの認定ガイドをしていただけないかと思っています。

<発言者1、発言者2に対する知事のコメント>

発言者1さんと発言者2さん、それぞれ素晴らしいお話を聞かせていただきましてありがとうございます。伊豆賞をお取りになられておめでとうございます。また来館者100万人も達成されておめでとうございます。女性だけでされているということもおめでとうございます。完全に熱海市長さんの心をとらえられたということもおめでとうございます。

ともかく民間だけで立ち上げて、10年間の実績をベースにして、この名建築、大変重要な建物だと、それをちゃんと聞きつけられて、これをまちの力で残していこうと、女性でやっていこうと、これは指定管理者としてこの人たちしかいないという、恐らく議員の先生方も、市長さんはもとより、この人たちにやっていただくのが一番熱海のためになるし、何よりも起雲閣のためにもなるし、また市民、女性を励ますことにもなると、こうした三拍子そろって任せられて、それが賞を取るまでになったということで、まことに市と民との熱海に対する郷土愛といいますか、まちを起こしていこうという気持ちにあふれた、それが素晴らしい成果を生んだということで、私どももここは風車の勉強会がありまして、そのときにあちこちから先生方がいらしていただくので、何とかいいところをということで起雲閣の一室をお借りして、そこで勉強会をしていただいたということでございまして、そんなことでそのときにお邪魔したと。

しかしそれは起雲閣全体を見るためではありませんで、私も議員の先生方に気を遣わなくちゃならない立場だったので、確かにしかし立派な建物があつて、また和風の建築がすばらしくて、そしてお庭もすばらしくて、恐らく春夏秋冬すばらしいものがあるろうと。今の季節は梅の季節でございますので、見どころ満開ではないかと思ひます。そしておもてなしの心について言われまして、11人の女性の方たちが心一つにして管理されているということがよく伝わってまいりまして、大変おめでとうございますと改めて申し上げたいと存じます。

そして発言者2さんは、本当によくやったださっております、起雲閣の方が、オアシス21の方が市と民との協働だとすれば、発言者2さんのところは県と漁協との協働で、先ほど県の水産業局長をお褒めいただきましてありがとうございます。そしてまあブリが150円、恐らく我々のところでは1000円になるんじゃないかと思うんですけども、こういうものがいろんな流通業者を経て、都会に行つてというのではなくて、それなら安い、あるいはおいしい、旬なものだと、景色もいと、こちらに来て食べられたらどうですか

というふうに今動きつつあると思うんですよ。

あの富山の氷見というところも、東京から行けば遠いですよ。また大きな市場に持っていかうとすれば時間がかかります。しかしそちらの人たちがこちらに来られてお泊りになって、そして朝採りで、そして朝市でそれをお土産で持って帰るとか、それが観光になるということを発言者2さんは見に行つて、これは観光だと、定置網は観光だということで、これを今我々は採ったところから最後の消費者のところまで、一次産業、二次産業、三次産業、全部含めて $1+2+3$ は6だし、 $1\times 2\times 3$ も6なので、すべてひっくるめましようとして、一番採れるところから最後の消費者の方々まで全部一元的にできれば一番いいじゃないですかというそういう試みをちょっと堅苦しい言葉ですけれども6次産業化といっているんですよ。それをなさってくださいているんですよ。そのモデルなんです。泣けるぐらいうれしいですね。

そしてもう一つはジオパークというのもなかなか、カタカナでしょう、大体。ですから何かわからないですよ。しかしカタカナということは、これはアルファベットに直せるんですよ。GEOでしょう、パークはPARKですから、そうすると一気に世界性を持つわけですね。だから世界の中の伊豆半島にするためにGEO PARK、大地の公園ですね、そういうふうにして、これが日本のジオパークに認定されたでしょう。あと数年後、2年余り後には世界ジオパークになりますよ。だからこれ来られます、内外から。

来て、遠いところから来られますから、必ず泊まられます。泊まって必ず朝昼晩と食事をされますから、ここは海がきれいだと、海産物があると。それはもう地中海に行つて、スペインあたりに行つて、朝皆そこで採れたものを北欧の方だとか、寒いところの人たちが南欧に来て楽しめるのと一緒で、そういうものをここで提供できるわけです。しかもジオパークという見るに値するところだと。それをダイバーの先生方たちがいろいろ来られる、沖合でダイビングする、あるいは浜から入っていく、いろいろなそれぞれの御興味に従つて案内してくれる方がいて、その方たちが一旦潜れば、その海の中の、大室山から来たこの城ヶ崎のすばらしい景観を海の中で見て、これを説明して下さるとなつたら、もう一生忘れない景色になりますね。だからこれもリピーターが必ず増えます。

それで今ジオパークに対してジオガイドというのが出ました。これは伊豆半島、皆さんそれなりに変化多様性に富んでいますので、それ全部知るのはなかなか大変ですね。東海岸と西海岸と全然性格も違います。一方は駿河湾に、こちらは相模湾に面しているということで、その両方があるのが実は財産だと思うんですけども、こちらのことについて知

っているけれども向こうについては知らないというのは、ある意味で当たり前かもしれないということで、そのガイドの資格について、確かにここの城ヶ崎については、もうこの人の右に出る人はいないというそういう人をガイドに認定しないのはおかしいというふうに使われているので、私も発言者2さんの言うとおりでということで、このガイドについてもこれから試行錯誤しながら、一番地域に合った専門家を育てていきたいというふうに使っておりますので、今の提言、前向きといたしますか、実現できる方向で、しかし一方で体で知った知識をお越しくくださった方々にお伝えするというので、今の資格についてのものも、委員会の方に御提言申し上げまして、こちらで実用に合った形でガイドの養成になるようにしたいというふうに住じます。

また骨肉分離機で、これで無駄を出さないという、すべて海の恵みを人々の栄養にして元気をつけていくというそういう形で、今まで捨てられていたものがこういう形で生かされたら、魚も喜んでくれると思いますね。それが給食になっているというのが特にいいと思います。これは恐らく関係者の方の御努力があったと存じます。

それからもう一つ、セノバというのは、つい最近静鉄がお造りになったデパートです。静岡駅前にごさいます。大変流行っているんですが、そういうところにもお持ちいただいているということでありがとうございます。

10 カ統ですね。定置網といえば、網代や城ヶ崎、そして発言者2さんということで、固有名詞を通じて広めていくといいんじゃないかと。今日はすばらしい美しい発言者1さんと、格好いい発言者2さん、まずお二人のお話を聞かせていただきましてありがとうございました。両方とも大変私にとってもうれしいお話でございました。

<発言者2>

ちょっと一言いいですか。ダイビングなんですけれども、実は本土で一番ダイビングのお客さんが来るのは静岡県なんですよ。で静岡県のライバルは沖縄県です。そのぐらいにダイビングが、特に伊豆半島ですね、西伊豆ですと大瀬崎、それから南伊豆、須崎、この地域ですね、多分これも皆さん知らないと思うんですけども、静岡県のライバルはダイビング事業に関する沖縄県です。

で、ダイビングは地元にとっても実はゴルフをやるよりちょっとお金が落ちるんですよ。ダイビングで1回、東京から来ると約1万5,000円ぐらいかかるんです。そのぐらいこの伊東だけでも去年あたりのデータを見ると12万人ぐらい来ていると思いますけれども、そのこともわかってください。

<知事>

ありがとうございました。

<発言者3>

こんにちは。

伊東ぷらんぼ女子会というまち歩きマップの代表をやらせていただいています、今はどっちかという、ホテルの女将というよりは、ぷらんぼ女子会代表ということで呼んでいただくことが多くなっています。でも稼業をおろそかにしないようにしながら、ぷらんぼも頑張っています。

まず伊東ぷらんぼというものなんですけど、伊東をお客さんに巡っていただくまち歩きマップでして、年間2回発行させていただいています。で、伊東市から補助をいただきまして、年間2回春夏号、秋冬号と出しまして、1回5万部出しています。基本的に旅館、ホテルに置かせていただくのと、あと観光協会、あとその中には商店などで協賛させていただいて、一緒にパンフレットを作ってくださいということで、広告費ではなく、本当に半年間、一緒にこのパンフレットのために協力してくださいというふうにお店にお願いして、少しお金をいただいています。そのお金と市の補助だけで一応運営させていただいて、作っているのが伊東市観光従事者の女性10名で作っています。

今年4年目に入りまして、その女性はみんな自分の仕事を持っていますので、あくまでもボランティアという形で作っているのです、月1回、2回、何とかみんなで顔を合わせて、ときにはお茶を飲みながら、打ち上げと称して飲みながら、みんなで意見を交換し合って、少しでも伊東に今元気がないと思うので、やっぱりそこを活性化するためにやらせていただいています。

現在、伊東は悲しいことに、街は街、宇佐美は宇佐美、伊豆高原は伊豆高原、何か分断されてしまっているような空気が長年ありまして、どうしても伊東って言うと、皆さん街の中だけのことを伊東って言います。宇佐美だって伊東だし、伊豆高原だって伊東だし、それぞれに魅力があるはずなのに、これを分断してしまうのはすごくもったいないということで、私たちこの女性の力というところちょっとおこがましいですけど、女性ならではの繋がり、男性だとやっぱりどうしてもしがらみとか、予算がないとか、お金が云々ということで動きづらいことがあるんですけど、女性は何となくお茶を飲みながら仲よくなったり、全然関係ないプライベートの話をして気持ちを通じ合わせたりして仲よくなっていきな

ら、ぜひ伊東を一つにしたい、これが一つの目的でもあります。

で、伊東をまず一つにした上で、やっぱり伊豆っていうものを一つにしないでいいと思います。今やっぱり世の中から見たら、伊豆って一つのブランドだと思いますし、伊東、伊東って言ったところで、熱海、熱海って言ったところで、多分力は小さいと思います。やっぱり全国的には伊豆という名前で、まずお客様を引っ張ってくるのが一番だと思うので、やはり伊豆半島が一つになってやっていけることが目的だと思っています。

伊豆って、今日知事さんもいらっしゃいますけど、どうしても静岡にぶら下がっているような、何かこう静岡県民という意識が今一つ、何か自分たちも薄いし、何となく背を向けてしまって、神奈川の方を向いてしまっているような気分になっているところがあると思うんです。

実際私もこういう商売をしまして、観光客の方は、7,8割は神奈川県、東京都からいらっしゃるお客様です。本当に近いところから。で逆に言うと、静岡県の西部からずっと向こうから来るかという、ほとんどいらっしゃらないですね。本当1割とかそんなものだと思います。それがすごく残念ですし、やっぱり静岡県の中で伊豆というのをもう少し知っていただいて、やっぱり来ていただくことができればいいかと日々考えております。

伊東市は観光立市ですので、観光で生きているまちです。その割に食べ物とか、キャラとかいうものが今世の中で言われるような観光のポイントというのがものすごく薄いと実感しています。どの会議に出させても、皆さん言うことは一緒です。「伊東って何がある?」「何だろうね」というのがやっぱり大半の意見でして、絶対これではいけないと思います。

やっぱり民間のみんなそれぞれが同じ思いを持って、同じ方向を向いて行政の方々と繋がって、やっぱり前へ進んでいくことが一番の道だとは思っております。私たちは微力ですけど、このぷらんぼを通しまして、やっぱり伊東を、まず伊豆を一つというのはもちろんですけど、まず伊東を一つにして、伊東がみんな同じ方向を向き、いずれ伊豆が一つになり、やっぱり伊豆として世の中に売っていけて、昔のにぎわいを戻していけたらなって実感しています。

私も稼業がやっぱり旅館業なので、今本当に厳しいです。本当に年々お客様は伊豆方面へ向かう方が減っているというのが現状です。だからやっぱり身を持って感じているので、少しでも伊豆、伊東、熱海、本当に皆さんが向いてくださって、足を運んでくださるといような方向へやっていきたいというのが気持ちです。

そのぷらんぽに関しましては、見ていただいた方がいらっしゃるかどうかわからないんですけども、中見ていただくと、本当に女性が楽しく作っている感じが出ていると思います。毎号毎号マンネリ化はしたくないということで、1回1回丁寧に企画をして練って、それで自信を持って作っています。本当に発行される時にはメンバー全員、何か本当に娘を嫁に出すぐらいの気持ちで作っていますので、本当に愛情を持ってやらせていただいています。これによってまた皆さんがちょっとおもしろいなとか、伊東ってこんなところがあるんだかというふうに思っていて、こちらを向いていただくことが私たちの今本当に小さな力ですけど、積み重ねて、地道にやらせていただいているような状況です。

4年迎えまして、来年で5年になります。10号という節目でもありますし、やっぱり私たち作っている者にとっては、紙面はあくまでも紙面なんですけど、できたら何か女性ならではの感性で感じることに、女性だからできることに、そういうところをやっぱり強く押し出して、少しでもいろんな人間関係を繋げていけたらいいなというのが根本的な気持ちです。

やっぱりこんなネットの時代ですし、いろんなそういうものが世の中にはそれで成り立っているようなところがありますけど、やっぱり最後は人間、人と人だと思っています。だからやっぱり人と人との繋がりを大事にしながら、観光についてやっぱりみんなで考えていって、やっぱり伊東を何とかしていきたい。その思いでやっていますので、ぜひまた何かありましたら一緒に声かけさせていただきますし、お声かけていただいて、一緒に何かしましょうよって言っていただければ、すごくうれしいです。

何でもお話、私はいろんな方とお話するのは好きですので、たくさんの情報交換をしたり、それによって輪を作っていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

<発言者4>

皆さん、こんにちは。

私は自営業をやっているんですけど、コンピューターのシステム管理、ネットワークの構築というのを基本にしております、それを生業にしているんですけども、熱海市長さんも思われているんじゃないかと思うんですが、一体何をしているんだろうと、「発言者4さんて一体何やっている人なんですか」とよく言われるんですね。

実は私は中学校から6年間、寮におりました。それから大学に行ってしましまして、東



京に行きまして、そうしましたら父が亡くなったものですから、やむなく熱海に帰ってきました。多分父が生きていたら、僕は熱海にいないと思います。それが25のときに熱海に帰ってきて、今私もうすぐ44になるんですけれども、かれこれ20年熱海に住んでいて、コンピュータのシステムやるのに、自分が食べるためにみんなにインターネットを使ってもらわなきゃならない、パソコンも使ってもらわなきゃならない。「使ってくれ」というふうに言っても、なかなかぴんとこないんですね。私が帰ってきたころというのは、まだインターネットが始まったばかりだった。

とにかくこれを何かに結びつけて使ってもらう方法はないだろうかと、いろいろ行ったわけです。実際私中学から熱海にいなかったもので、何となく地の人間のように地の人間ではない。友達が小学生のときのしかいないので仲間がいない。まずそこから作っていかないと、自分がここにいることができないと思ひまして、とにかく足を使いました。とにかくみんなに頭を下げました。父の知り合いにはみんな頭を下げ、顔を覚えてもらうということを一生涯やりました。

その結果、今みたいにこういう場所にいられるのは大変光栄なことなんですけれども、そこで気がついたことは、熱海は組合が、多分小っちゃいものまで入ると100超えると思います。熱海市観光協会という大きい団体があるんですけれども、その熱海市観光協会は団体を束ねた団体なんですけど、熱海市観光協会に理事として入っている団体は44団体あります。クリーニング組合から菓子組合、名産品業界、そういったものからずらっとあります。すごくたくさん組合があるんですけれども、実はほとんど機能していないんですね。

それから私は25歳で戻ってきました、「帰ってきたんだったら、じゃ町内会で青年会やるのか」と、青年会作ってちゃんとやっていこうという話になりました。私が一番年下で、青年部であって青年ではないですね。実際20代は僕だけでした。30代ゼロでした。そんな状態で青年部なわけです。とにかく青年の数が少な過ぎるということですね。

それからもう一つ、家を継ぐという空気がもうびっくりするぐらい薄い。私は熱海で6代目なんですけれども、実際多分僕、父が亡くならなかったら本当に継いでない感じですね。でも何か継がなきゃいけない、お寺もある、神社もある、お墓もある、放っておくわけにいかないなど、母が一人ぼっちになってしまったので私帰ってきたわけですが、そういう家を継ぐ空気はびっくりするぐらい薄いわけですね。僕は帰ってきたわけですよ。何か帰ってきたのがばかばかしいというか、ばかにされているというか、「何で帰ってきたの」と言われるような空気というんですか、別にだれかに言われているわけじゃないのに。

商売人の街なんですね。シャッター街が多くなっちゃってますけれども、商売人の街なんですけど、肉屋さんが、お肉屋さんいないですよ、とりあえず通りをお客さんが歩いているわけですけど、お肉のケースの上にひじとかほおづえをついて、「客が入ってこない」と言っているわけです。なぜ「いらっしやい」とか声をかけないんだと。

まず今、多分伊東もそうじゃないかと思うんですけど、お店の中から声聞こえないと思います。熱海もそうですね。平和通り、今駅の近くのところはお客さんがたくさんいるので、呼び込まなくてもお客さん来る。でもお客さんが歩いてないところはお客さん呼び込んでない。全く活気がない。多分声を出しているだけで、僕活気が出ると思うんです。ところが、まず若い人がいない。これ悪循環ですね。これらの問題をどうやったら解決できるんだろうと。帰ってきたこと自体が悲しい思いをするのは僕は嫌だということが、僕の動き始めの実モチベーションだったんです。

確かに必要なこと、起爆剤だとか、ブームだとか大事なんです。例えば今熱海市、実際移住、定住を促進しよう。実際人が少ないということは、日本の国で考えてみたら国力が下がっていく感じですから、人口が少ないというのは何となくやっぱり怖いんですね。

そういった今のソフトウェアとして、何かニーズに応える、今の不安を何とかするというのも大事だと思うんですけど、そういったブームに乗るとか興す、それからニーズに何とか応えるということですね。でもニーズに応えることだけやっていくと、大体品がなくなるんです。で、そのニーズに応えるばかりではなく大事だと思うことというのは、この3つはやっていかないと、全部これどれか一つだけやっていくというのでも、多分うまくいかない。

この三つどもえをどうにかしなきゃいけないというようなことを考えて、私はNPOエイミックとって、温泉と健康をキーワードにしたNPOの理事長を今務めております。それからまち歩きを基本にやっている「オンたま」などをやっている atamista というNPOがありますけれども、その理事を務めています。そんなことも含めて非常勤講師、熱海にある専門学校の非常勤講師をやったり、「あたみネッツ」という今市役所のホームページのトップを飾らせてもらっていますお店の情報発信をする仕組みとかを作って、それを提供するというようなことを私はやっています。

それがどうしてこういうことが起こったのかというのをずっと考えていったところ、熱海とか伊東とかは温泉観光地ですね、というのはいろんな価値観を持っている人、極端な

ことを言えば、それがもうホームレスであろうが、すごいお金持ちであろうが、女好きの人であろうが、女性たちが集まってきてとか、いろんな価値があったものを、これを古くからそれを全部受け入れるということに対して慣れた街だと思います。そういったいろんな価値というのを自分の価値とは違うものに迎合することで成り立っている街だと思うんですね。

その結果どうなるかという、これはまさに僕の考えなんですが、人を信じないところから始めるというところがあると思います。熱海の中で「ああ、そうだよね」と言って、にこにこしてみんなで話しているんですけども、どうも相手を信じているのか信じてないのかよくわからないというようなところで、何となくすうっと進んでいく、そういったところがあるわけなんですけど、それが当たり前です。

それが、全世界的だと思うんですけども、実際価値観がどんどん多様化して行って、どんどん増えていく、いろいろな種類のものでできていく、これはいい、これはいい、これはいい、これはいい、これをやってもいい、これをやってもいい。そうやっていくうちに、共通の価値観と言われるもの自体の幅がどんどん狭くなっていっている。この共通の価値観というのは、これを広げないと、人と話をちゃんとすることができない。だから組合だとかが機能してないんじゃないのかというふうに僕は考えたんですね。

この共通の価値観と言われるものがなくなってしまったら、今度は極端な話、全然ないというふうな状態を皆さんちょっと想像してみてください。そうすると、大体自分の話していることというのを、人は聞いているようで聞いてない状態になるわけですね。そうすると自分が話していることを聞いてもらっている感じがしない。それから伝わっている感じがしないわけですね。そうすると、どうなるかという孤独感というものが生まれると思うんです。人に聞いてもらってない。まだ孤独感だったらいいんですけど、それが実際の孤独を生んでしまうという状態です。

ですからこの共通の価値観の幅というもの自体を少しでも広げていかないと、とにかく隣近所との付き合いですね、私はまだ父が死んだころ、20年前は法事をやるたびに隣近所、向こう三軒両隣以上呼んでいました。ですけども今法事でお隣から呼んだら迷惑だと言われるわけですね。迷惑かければいいじゃないかと。迷惑もかけないような人生をずっとやっていくから、お隣さんとも本当に挨拶程度しかしなくなっちゃうわけです。そんなことで商店街が、組合が成り立つわけがないじゃないですか。

そういうことなのに、この共通の価値観というものが、多分町内だったら町内にあるは

ずなんです。それ自体が崩れていっている。これは全体的に熱海だけではなく、伊東だけではなく、日本全国にこのいわゆる僕これナショナリズムに近く、「エリアリズム」と呼んでいるんですが、「エリアリズム」自体が進んでいかないと、街は壊れるぞというふうに僕は思っているんですね。

この街が壊れていくのを何とか食い止めたい。これを私はそうすると隣の商店がなくなっちゃったら寂しいなっていうぐらいになっちゃっている、今は。実は私のうちも設計事務所と私がコンピュータのシステム管理をやっている、1階がもともと土産物屋だったんですけど、空いちゃっていて、私もシャッター街を増やしてしまっている一人なんですけれども、ここの問題を東京で例えば渋谷で、去年行ったお店に今年行ってみたらなくなっていたと思っても、多分皆さん寂しく思わないですね。残念だとは思いますが。

つまりですね、自分のものになってないところというのは、残念に思って終わっちゃうんですよ。そういうのを僕は都会とこういうローカルの街との比較で、そのエリアリズムが減ってきている状態というのを私は「東京化」と呼んでいるんですが、熱海がどんどん「東京化」していってしまうということに対して、すごく危機感を持っています。それを少しでも減らす、少しでも街のことを好きになってもらう。つまり郷土愛を育てていかないと、街を好きになっていく気持ちを作っていくとかならないのではないかと。そういう部分をいろいろ含めて活動をしているわけなんですけれども、つまり人とか物とかというものをちゃんと評価できる人というのを作っていくと、人の話を聞いてもらう、自分が話していることを聞いてもらっている感じがするようにすればいいわけですよ。そうすればうまく進んでいくのではないかと。

これはとっても難しいことだと思うんですけども、僕今地方自治と言われるもの自体が少しずつ進められている、昔からももちろん地方自治はあるわけなんですけれども、進められている中で、一つ教育の強化というもの自体をやってみてはどうかと。全国を先駆けて、恐らくさっき言った共通の価値観、つまりこれはもしかすると常識と言われるものなのかもしれませんけれども、この共通の価値観の幅を広げるといって、これ同じことをみんな考えるとやっているわけじゃないんですね。共通の価値観、同じように考えるところというものの部分を増やすという話です。それをするだけで孤独感が減る。そうすれば、これすごく極端になるかもしれませんが、不登校が減ったりですとか、引きこもりが減ったりですとかということにもきっと繋がるのではないかと。この共通の価値観を広げるといって、これはもう教育しかない。

なので、どうやってやっていくのかはわかりません。わからないんですけど、例えば実際国立大学自体が師範学校から国立大学に昇格するときというのは、当然教育学部があったわけですが、それと同じように、日本全国の国立大学というのは、日本全国で同じネジが作れるようにということで、工学部が必ず入ります。だから教育学部と工学部しかない国立大学もあります。

そういう形で日本全国に工学部と教育学部を置いたというような形で、例えばですけど、静岡の学校にはこの学部が必ずあるというようなことですか、できることかどうかわかりませんが、最近テレビはしゃべっている言葉に字幕が出るので、その字幕というのでも常用漢字じゃなくても使う、漢字を使うとか、そういうようなことから、熱海のテレビは難しいと言わせてもいいんじゃないかと。でもそれがもう5歳の子どもから、熱海のこと、伊東のこと、静岡のことというのをちゃんと見ている子どもたちが15年、たった15年で、多分その価値というのは結果が出てくるんじゃないかというふうに僕は思っています。

それでエイミックでは今年で11回目ですけども、絵画コンクール、湯祭り絵画コンクールといって、熱海の幼稚園、小学生、中学生に自分の目で熱海の中を見て絵を描いてほしいということが続いているわけなんですけれども、私が小さいころは、熱海なんかに行くと人間だめになっちゃうからどんどん東京に出て、自分の力をもっと試せと、当たり前ですね、若者が頑張って表へ出ていこうとすること自体を引きとめる大人は一体どうなのかと思うので、出ていくことは全然構わないと思うんですね。

ただ自分の街だと思える街にみんなですていかないといけないのではないかと、そこがすべての始まりじゃないかなというふうに思っております、熱海、伊東、静岡にいと安心できると。そうですね、自分の居場所ができるということですから、そういった共通の価値観というもの自体をきちっとつくっていくということですね。それを一つ、教育って一歩間違えるとすごく大変なことになってしまいますし、やることはとっても難しいと思うんですけども、できることということで、地元のところからといって私は頑張っております。

そんなところで知事にこの教育といったところで、静岡県はこういう特別な教育をやっていますというようなものを何かやっていただくと僕はうれしいななんていうふうに思っております。

<発言者3、発言者4に対する知事のコメント>

それぞれ発言者3さんと発言者4さん、最初のお二人よりそれぞれ10歳ほどお若くてパワーがあふれているという感じがいたしました。

発言者3さんの方から、伊東も一つと行っていただいて、それは実は伊豆半島を一つというそういう強いメッセージを出していただいて、大変ありがたいというふうに思っております。そしてそれをするためにこの雑誌ですね、ぷらんぽと。これは編集されたり、あるいは現地を回られたりすることは、すごい勉強になっていると思うんですけども、ですから人に訴えかけるように作らないといけないと。女性の感性でこれを訴えるようにしようということで、自分たちが感動していないと相手に伝わりませんから、その感動をどのように伝えるかというために、自分の土地、あるいは何かのイベント、あるいは名所旧跡、あるいはジオパークのようなところ、こうしたものを上手に書き、相手のハートを揺り動かすというふうにしなないといけないので、これは大変な能力を要求されるころだと思います。それが来年には10号を迎えられるということでおめでとうございました。何とか成功していただきたいと。

そしてお客様が大体関東から来られるということなんですが、それはそうじゃないですかね。どこからも来られると、違うところに来ているんですよ、やっぱり。東京から横浜に行ったとか、横浜から川崎に行ったとか、それじゃ日常生活の中の移動、しかし熱海に来る、伊東に来る、伊豆半島に来るとなれば、これは憩いに来た、あるいは違う空間に来て、もう精神がさあっと開かれるというか、安らぐというか、ですからここは違うところなんですよ。

だからそれが実は静岡の玄関口なわけですから、西から来る人は、オアシスと言われる浜名湖を見た途端に違うところに来たと、ましてや富士山見たら違うところに来たというふうに思うので、そうしたものがたくさんあるのは結構なことです。ただばらばらなのは具合が悪いので一つにということをお願いしているのが僕は大事だと思っているんですよ。

ジオパークというのも伊豆半島全体ですから、伊豆半島はなるほどそれなりに広いです。しかし、そうですね、やっぱり狭いですよ。つまり小さいというふうに見る器量が大切です。心の大きさがですね。先ほど発言者2さんが沖縄と言われたでしょう。沖縄って南北600キロありますから、その沖縄本島から宮古島を経て、石垣島まで600キロあるんです。ここはわずかもう数十キロでしょう。

それから朝鮮半島の南に済州島ってありますでしょう。あれジオパークですよ。それから世界自然遺産です。それからエコパークです。それからもう一つ何か世界七大不思議で、これ大したことないんです。ここと比べてです。行って見ればわかりますよ。はるかにこちらの方がいい。ところが彼らはそれを宣伝したんですね。もうまずはグアムに行くことはできない、日本の宮崎に行くにもちょっとお金がかかる。それならば済州島は夢の島だということで宣伝して、この島はこんな珍しいものがあるとか何とかかんとか、山がある、漢拏山（ハンラサン）というんですけれども、2,000メートルまでいかないですよ。珍しい海岸線、向こうは茫洋とした海です。こちらは初島が見える、あるいは房総半島が見える、あるいは丹沢が見えると、天気のいい日には。ですから変化に富みますから圧倒的にこちらの方が有利。ところがそれをこちらの人には行ってないでしょう。見に行っていないでしょう。

この間、伊豆半島をジオパークにするというので偉い先生が見に来られて、ぐるっと見られて、先ほどちょっと地中海の話を、地中海というのはヨーロッパ人があこがれるところですよ。あこがれる中で一番あこがれるところはイタリアのナポリの沖にありますカプリ島なんですけど、非常に大金持ちが住まわれている。しかし船で行かざるを得ないです。不便なところですよ、ある意味では。青の洞窟だとか言っているけど、城ヶ崎なんかと比べたら、もうへみたいなものですよ。はるかにこちらの方がいいんです。そこを知っている人が行って、驚いたと、すごいところだというふうに言われているわけです。

ですからここは、先ほど発言者4さんがおっしゃってましたが、店でもお客さんが来るのが当たり前だと思って、来るのが当たり前だと思っているので、行くというそういう思考がないと。ここよりも優れていると人が言っているところを見に行ってみるといことですよ。例えば沖縄にダイビングに行かれる人がいるといっても、これは実はそこに静岡空港で毎日飛んでますから、ANAが飛んでいるんですよ。全日空の搭乗率が2番です。羽田からいろいろ出ているでしょう。日本中のいろいろな路線の中で、静岡空港から沖縄へは簡単に行けます。

ちょっとここからだと不便だと思いますけれども、そのうち富士山静岡空港の下に駅を造りますから、熱海からすっと思えば、さっと上に上ったら空港というふうになります。10年ほどでやりますから、もうちょっと待ってください。恐らくいずれにしても皆さん10年後にはまだ生きておられるでしょう。ですからそういうふうになっていく。

その沖縄なんかも知っているのと、済州島なんかも、韓国に毎日飛行機飛んでますから、

見に行けば、何だこんなものかと。そして行って、向こうに行ったら言葉通じないですよ。カプリに行ったら、ましてやもっと通じない。そうすると行った者同士で仲よくなりますから。観光協会が十幾つありますでしょう。その観光協会の中にいろんなものがぶら下がっているとおっしゃっている。観光協会の方で、特に意欲にあふれている発言者3さんとか発言者4さんみたいな人たちが一緒に加わって行ってみると、そうすると食べ物だって、カプリはこれしかないのか、何だこんなものかと、こちらは海の幸から山の幸から何かからいっぱいあると。お花の数は全然違うと。春夏秋冬全部いつでも来れるとか、そういうことで自分たちはそこと違ってこういうものを持っている共通性があるという意識が芽生えてくるわけです。

ですから私は伊豆半島は世界の中のジオパークに今脱皮しようとしている。従来の組合から、まさに発言者4さんは新しいインターネットを通じた組合、新しいネット、新しい絆、これを今作ろうとされているのは、まさにヘビ年にふさわしい、もう脱皮して、新しい身体で伊豆半島を売り出すという、発言者3さんも同じですよ。伊豆半島を一つにする、まずは地元の伊東からとおっしゃっている。

そして発言者4さんはこちらに20年前に戻ってこられて、お父上は喜んでおられると思いますよ。よく戻ってきた。だから草場の陰で「よく帰ってきた、それでこそおれの息子だ」というふうに思っておられると思います。郷土を愛されたお父上、お前に託しているというのがあるんじゃないでしょうか。それで足を使ってお父上の知り合いをすべて回って、そうした中で信頼を得て、そして今学校の先生もされているということですね。

私は、教育はこういう絵画コンクールをされるというのはとってもいいことだと思いますが、実は自分の教育が大事です。子どもの教育はもっと大事ですが、子どもの教育をする自分、それから外から来る人に対して親切で、地元のことについてちゃんと説明できる、例えば先ほどのジオガイドじゃありませんけど、これもですね、知っているけれども、きちっと知らないといけない。きちっと知っているという人が増えると、おのずと子どももそういうふうになりますから生涯、ある意味で勉強です。一生勉強みたいなものですね。

ですから日々新たに何か一つこんな発見があったとか、今日初めて生まれたと思ったらどうですか。そうするとすごいすべてが新鮮ですよ。そういう目で世界を見たら、すごく新鮮に見えるということがあると思います。だから心の持ち様一つ。

それから仲間と、やっぱり伊豆半島の外に出て、特に競争相手、日本人が今あちこち行っていると、そこのノウハウを取ってくると。だけど同じものは到底できません、だって



地域が違いますから。これを向こうのノウハウをこちらに生かすというふうにすると、当然ダイビングでも沖縄で見るとこちらで見るとは違いますから、そういうものの違いで売っていくということができると思います。

そんなわけで、私は今産みの苦しみというのが発言者3さんと発言者4さんのお話を聞きながら感じましたけれども、このパワーで伊東は言うまでもありませんけれども、伊豆半島をジオパークなどを通して一つにしていくと。それからやはり攻めるという、受け身ではなくて攻めることを通して、それは心の持ち様一つなので、ある意味で新鮮な気持ちで取り込んでいくというそういう新しい攻める観光を、待つ観光から攻める観光、世界中の伊豆半島という自意識を持ってやっていただきたい。あなたならやれるというふうに思いました。以上でございます。

#### <発言者5>

私が福祉に関わる仕事を始めてから13年が経ちます。初めて出勤した日、障害を持った利用者の人たちが、それは屈託のない優しい笑顔で迎えてくれ、その日の帰り道、偶然会った利用者の方が道路の向こうから大きく手を振り、何度も頭を下げて挨拶をしてくれました。この人たちを知り、関わることで、私は楽しく温かい気持ちになることができました。

障害について知らないことで、差別だったり、偏見だったりということがあったり、何気なく言った言葉が誤解を招く、そんなことがもしかしたらあるかもしれません。何かしたいと思っている方が、きっかけがないから何もしないでいるということもあるかと思えます。今私たちNPO法人クープでは、知っていただくと思って活動をしています。地域の皆様に感謝の気持ちを込めて、「てとてと手」というオレンジビーチの清掃、また「クープショー」という活動を紹介した展示即売会、「クーパーズ」という機関紙を発行して活動の紹介などもしています。

その「クープ」とは、それぞれの目的と特徴をもった「おおはら」「かめりあ」「プラウ」「喫茶オレンジ」「工房うさみ」という5つの障害者支援施設と、障害を持った人たちが支援を受けながら自立した生活を送る3つのグループホーム「コルティエーホ、いちょうの木」「めいぷる」から成っています。その中で私たち「工房うさみ」の活動を少しお話しさせていただきます。

「工房うさみ」ではお土産の菓子箱折りをしています。これは利用者の人たちがほとん

ど自分たちでできる慣れた作業で、とてもいいんですけれども、観光が景気の影響を受けやすいということから、作業量が安定していないことと、作業工賃が安価なため、収入が少ないことが残念です。

陶芸では、観光施設でサボテンを入れて販売する植木鉢を作っています。またアビリンピックの県大会で金メダルを受賞した利用者が在籍するなど、楽しくできる作業です。反面、これも材料費と電気料、特に窯焼きにかかる電気料、それなどがありまして、利益が極めて低いということも残念な現実であります。

縫製や織物もしているんです。それにはボランティアさんの力をお借りしながら、丁寧な製品づくりを心がけているんですけれども、脅威は百円ショップのあの安さ、それと福祉施設の製品は安いというイメージ、それがちょっと邪魔をしているのかなというふうに思います。

また地域のイベントやバザーなどには進んで参加したり、海に近いものですから、地震による津波、その心配もあり、避難訓練などでは地域の方に協力をお願いしたりしています。また周りの人に知っていただきたいということで、月々配付しておりますお便りとかも、最近では近所の方にはなるべく手渡しをして、読んでいただくようにしているんですけれども、回を重ねるごとにいろいろな声かけをしていただいたり、励ましていただいたりして、本当に発信して知っていただくということの大切さを今感じています。

一方、残念な出来事もありまして、脳梗塞を患ったお母さんと、知的に障害があり言葉での伝達が難しい青年が、支援を受けながら二人で仲よく生活をしていました。お母さんは高齢となり、病気の影響とか足腰の衰えなどで、二人での生活が困難になったケースなんですけれども、青年はグループホームに入所することにしました。でも障害者の青年と高齢の母親が一緒に入所し、法的支援を受けることのできるグループホームはありません。もし特例で入所できたにしても、そのときお母さんはこれまでのようにヘルパーの支援を受け続けて生活することは、制度上できなくなります。制度がないのですから、もちろん障害者の受け入れ施設の方にも、それを受け入れる準備はできていません。結果、親子は別々の生活をする事になりました。

どうにかしたいと思うのにできないケースというのがたくさんあると思います。4月より自立支援法が障害者総合支援法になり、難病患者が福祉のサービスの対象になるという、そういうこともありますけれども、このように障害者と高齢の親が別々に支援が行われるのではなくて、せめて親子が普通に幸せに暮らせる使い勝手のいい支援の形、人に優しい

福祉の構築を現場で働く者として強く願っています。

最後に、現場で働く職員の頑張る力とか、働きやすい環境にも目を向けていただきたいとお願いして終わりにさせていただきます。

#### < 発言者 6 >

私はなぎの木クラブで放課後児童クラブの指導員をしております。よろしく願いいたします。

クラブの代表ではあるんですけども、ただの主婦なので、主婦目線でもってのお話しかできませんけれども、よろしく願いいたします。ちょっとこういった場に慣れておりませんので、お話をまとめてきましたので読まさせていただきます。

なぎの木クラブを開設してちょうど1年が経過し、学童というものが少しずつ浸透してきたところです。このクラブを立ち上げようと思ったきっかけは、私自身が他県から熱海に移住してきたので、近所に親戚も親もいなく、子どもを預かっていただける場所が欲しかったからなのです。

他の地区では学童があるのに、なぜこの学区にはないんだろうと疑問に思っていたときに、学童を必要とする声は大分前からあるが、なかなか実現せず、どうしても必要としている家庭は、学校に上がる前に学童のある地域に引っ越してしまい、学区からますます子どもが減ってしまうというお話を聞いたことと、犬の散歩をしていると、熱海は通勤圏なので物件を見に来たけれど、子育ての環境を重視して探していますがどうですかというお話を聞かれたので、この地区に子どもを増やすには、やはり学童を作り、提供していかなければならないという思いが強くなり、市へお話に出向きました。

その後、プロジェクトチームを立ち上げ、多くの方々のお力と子育て支援課の御協力のもと、話し合いの場を何回か設けましたが、最初のころは行政関係や地元関係者の方々になかなか御理解をいただけなかったので、時間をかけて御理解をしていただき、プロジェクトチームリーダーの尽力により人の輪ができ上がり、3年をかけて無事開設することができました。

私の住む伊豆山地区では、歴史もあり、自然環境もよく、駅に近く、住むにはとても条件のよい場所なので、子育てしやすい環境を整え、熱海に住む魅力をアピールしていけば、他県からの移住者がどんどん増えるのではないかと思います。

今は出向く前に、まずはネットで現地の情報を調べてから足を運ぶ方が多いと思います

ので、市のホームページで「熱海で子育てしませんか」と、熱海での子育ての魅力と、子育てに力を入れていることをアピールしていけば、特にファミリー層の移住者が増えるのではないかと思います。移住者が増えれば、いろいろな角度から熱海市を見る目線が増え、多方面の知識や情報を持った市民が増えるので、上手に取り入れて、まちづくりに活用していき、住みやすい環境を提供できれば人口が増えて、熱海市はいろいろな意味で潤っていくのではないかと思います。

私は熱海に住み始めて間もなく9年目になりますが、ちょっと遠出して戻るとほっとする場所になりました。御縁があつて熱海に住み、熱海人になったので、これからも地域のために何かできたらと思っています。

最後に、会場にお越しの皆様、もう既に活動されている方もいらっしゃると思いますが、何か地域のためにできることはないかとお考えがあつてお越しになっている方もいらっしゃると思います。私のようなただの主婦でも、市はきちんと動いてくれました。何か思い描くことがあれば、ぜひ行動してみてください。

#### <発言者5、発言者6に対する知事のコメント>

お二人は大変立派な活動をされておられて頭が下がります。特に発言者5さんが紹介されたお話は身につまされるところもございまして、非常に深刻というか重要な問題です。介護などに当たる方々、福祉に当たる方々は、人材が足りないんですね。一方で離職率も高いんです。何とかこれを変えたいということで、長くいられれば給金が増える、そしてまた資格も取れるというふうにして、働くことに、何と申しますか励みが出るようなのを全国で初めてこれから導入しようとしております。一方、それは介護される方、あるいは障害を持っていらっしゃる御本人の方、この方たちがもちろん主役であります。

そういう中でお母様が高齢になられて、お坊ちゃまがグループホームの方に行って世話を受けられて、一緒に親子が生活ができないと、これは悲劇ですね。障害を持たれている方を励ますためのホームと、高齢者の方たちの世話をするためのところと、両方とも弱者に対して手を差し伸べようとしたら、結果的に親子が裂かれるということになっているというのは、当然いろんなそういう事例があると思うので、これ何とかそういう制度での問題なので、制度を変えればできることだと思いますので、このあたりのところちょっと勉強させてください。今具体的なお話だったので、どういうふうになれば、こうした制度上の欠陥を直せるのかというふうに痛切に感じた次第でございます。

それから発言者6さんは来られて9年目で、実は人口の減少、子どものいない街というのは、もう未来はありません。街に子どもがいる、あるいは街に若い人がいるというのは、それ自体が飾りなんです。飾りと言うとおかしいですけど、華やかさをつくるわけです。ですからとても大切なことです。

日本全体で人口が減っておりますけれども、静岡県もついこの間まで静岡県民380万と言っていたわけです。ところが今373万ぐらいしかいません。ひょっとすると今年中に360数万というふうになりかねないぐらい、ものすごい勢いで富士山を下っている感じで、私は宝永山のところでぐっと支えたいと思っているぐらい深刻に思っております。

そのためには子育てをしやすい環境を作らないといけない。ちなみに35市町がありますがけれども、女性の方たちが一生の間に何人子どもを産むかという、これ合計特殊出生率というんですけれども、日本全体で1.38人なんです。2人ということであれば人口は減らないんですけれども、日本全体で1.4人ということで、人口はどんどん減っていつているわけですね。静岡県全体では1.48人なんです。1.5人なんです。一人っ子さんが多いということなんです。しかし市町で違うんですよ。35市町があつて、残念ながら熱海が一番低いです。それは熱海の性格によって、もう子育てを終わられた方たちがこっちに來られたりして、出生率が統計上は少ない。

しかしそれは街の性格だと思いますが、しかし今発言者6さんが自分も住んでみて、ここでほっとすると。そして足らざるものは放課後の児童のクラブがあれば大分違うと。そしていいところなので、都心にも近いし、そしてこういう行楽ができる、温泉もたくさんあつて、人が來たいと思うところですね。そういうところに実際に生活できているということのよさというのがあるので、ちょっと工夫すれば子育てにいい環境ができると。その見本を言っただいて、最初、市の方も担当者ですら理解がすぐにできなかったと。それがしかし地道に努力されて、ようやくこういうクラブが立ち上げられるまでになったと。そしてこうして大きく社会的に訴えられるところまで來られたということでもあります。

これは主張があるというよりも、既に現実がありますから、小学生のお子様を抱えていらっしゃる、ですからそういう人たちにとっては切実な問題であります。保育所の問題、それからまたこういう学童の問題、これはちょっと工夫すればできるということで、お母様方、あるいはお母様を経験されて、それなりに社会的に余裕のある方ですね、そういう方と組んで、何とか子育てをしやすい環境をコミュニティとして作り上げることができないか。

市だけでもなかなか難しいところがございますので、やっぱり地域の子どもは地域で育てるという、そういう共通認識ですね。そういうものが出来上がってくると安心していられると。特に子育てを経験されたお母様方というのは、いろんなことを経験的に御存じなので、このぐらいの年のときにはこういうふうに子どもを扱うと大丈夫よということが分かって、若いお母さん方も安心できるということで、これはむしろ経験を積まれているの方が先生として重要なので、コミュニティの柱になる方たちというのは、長く居られた方になると思います。若い人たちを包み込むような形で、若い人たちが安心して生活できるように何とかできないかということを思った次第です。

熱海市長さんのもとで今回こういう子育て支援について、いい一歩が踏み出されているということで、まだ丸1年ということでございますね、昨年からということなので、まだよちよち歩きだと思います。これを輪が広がるようにお願いしたいと。私の方もできる限りのことをしたいというふうに思います。ありがとうございました。

#### <傍聴者1>

今いろいろと御発表いただいた皆さん方は、いろんな角度からのまちづくり、地域づくりのためにいろいろと御努力しておりまして、非常に敬服いたします。それから知事もこれらの発表された内容について真摯に受けとめていただいて、これから県政に反映させていこうというお約束をいただいておりますので、ぜひそれを推進していただきたいというふうに申し上げたいと思います。

それで今まで皆様方が発表されたものを総まとめしまして、ちょっと質問というか、お願いしたいと思うんですが、知事には御提唱いただいたジオパーク推進、これで伊豆半島に火がつきまして、ようやく日本認定、それから世界認定に向けて、これから歩みが加速していくと思うんですが、それと同時に東部地域についての地域づくりの基本方針、お手元にそれぞれ配られているリーフレット「富国有徳の理想郷“ふじのくに”づくり」の中に「地域づくりの基本方向」というのが出されております。

ここで東部地域というところを見ても、「日本のシンボル富士山を世界との交流舞台とした健康交流都市圏」という基本方針がございます。その中で主な取組として、1番目は医療健康関連産業の集積と交流による都市圏の形成、それから2番目にファルマバレー構想といいますか、医療健康プロジェクトの推進というのが2つ載っております。

このファルマバレー構想の推進について、今どういう状況にあるのか、ちょっとそれも

お伺いしたいと思います。それで関連づけまして、その下の方に伊豆半島地域というのが出ています。伊豆半島地域のところには、「世界レベルの魅力あふれる自然を生かした観光交流圏」、主な取組としまして「地域が一体となった世界ジオパークへの取組」、それから2番目に「国際的な健康保養地づくり」、それから3番目に「定住・交流居住の促進」という3つのテーマがあるんですが、申し上げたいことは、伊豆半島地域はファルマバレー構想の中でもって先端保養産業を推進していくということで、富士山麓の方の先端医療産業の集積、そのプロジェクトと同時に、伊豆半島はそういうふうにすみ分けされておまして、この伊豆半島の主力産業であります観光振興と関連づけた、いわゆるサービス業を中心としたウェルネスビジネスというものをこれから開発していく必要があるということが考えられています。それについて県、あるいは東部地域政策局でどういうふうにお考えになっていただいて、どのような推進を今されておるのか。ちょっとその辺をお伺いしたいというふうに思います。

<傍聴者2>

知事さんのお話を聞いて、ああ、よかったなと思ったんですけども、この東伊豆の実情をあんまり分かっていないんじゃないかなと思ひまして、言わせていただきます。

私たちこの地域の人たちは今何とかしてほしいんですよね。2年後、3年後、あるいは10年後という効果はまだまだ先のことで、今大変この東伊豆地方、西伊豆のそうかもわかんない、東日本大震災から観光が大変疲弊しています。どの方に聞いても「厳しい」「厳しい」「厳しい」って、「いやあ、うちはいいわ」というのは1軒もありません。昔熱海でも、熱海しか知りませんが、熱海でも200軒以上あった旅館ホテル協同組合が現在60軒切ったそうです。そのくらい観光が疲弊しているのに、県は一体何をしてくれているのかと言いたくなるような話ですけどね、今ジオパークの話をされました。

実際私も行ってきました、下田の果てまで行ってきました。大変危険な場所、私たち60過ぎの、さばを読みましたけれども、70代ですけどね、主婦にとってはとっても危険な場所です。私1周するまでに3回こけました。ただ、周りに人がいたので、こけるときに助けられましたけどね、危険です。子どもたちにも、高校生、あるいは大学生、またこういういった科学、あるいは考古学などを研究する人たちにとっては、素晴らしい場所かもしれません。でも私たち一般、本当に観光を楽しんで、「よかったね」と言って帰る人には全く興味はありませんでした。ただ「すごいね」とは言いました。危険なんですよ。

ちょっと末端を走りますと海がすぐです。流れがすごく速いんです。子どもたちが落ちたら誰が助けに行くの、その話も出たんです。「ここ誰か落ちたら、誰か助けてくれる？」と言ったら、私は遠慮するというようなそういう場所です。また急な突風が吹きました。すごくいいお天気だったんですよ。みんなわあっと言って重なり合いましたけれども、そういったこともあります。

ここを全国から、あるいは世界から人が来てもらうには、まだまだ本当に時間がかかると思います。今この東伊豆では即効性があるイベントをぜひ県にやってほしい。かつてはこの東伊豆でも莫大な税金を県に納めたんです。調べていただいたらわかりますけれども、それが10分の1近くになっていると思います。それくらい閉塞しているんですよ。それをぜひ静岡県が助けていただきたい。

私は静岡県の伊豆半島を売るには、食べ物と景色と、それから花しかないと思っています。私前にも言いました。これが本当は1年続ければいいんですけれども、続きませんよ。1月から4月まではJR東日本がイベントを開いてくれています。東京からの直行便で河津まで行く電車があります。そういったふうに各交通機関などもやってくれてますけど、車で来る方たちはこういったことを知りません。だから車で来る方たちのために、静岡県はぜひこの伊豆半島のPRを年に2回から3回、テレビでやってほしいんですよ。観光地がどれだけあるかわかりませんが、すべての原因はお客様が来てないことで、雇用から、いろんな施設からなくなっていくますけれども、これが賑やかになって、皆さんの懐にお金が落ちれば雇用も生まれるんです。

実は私今70歳ですけども、パートをしたいと思っています。年金ではとっても暮らせません。けれども全部断られました。このパートの就労のことも県はやってほしいなと思います。70過ぎて雇用してくれるところには、県税を少しおまけしますよぐらいのことをやっていただければ、私たちももしかしてパートに行けるかもわからない。

実は私先だって警察にどなり込んで行きました。というのも実は万引きで捕まった方が、最初の警察の態度が余りにもひどいというので泣いていたんですね。それを聞いて、私すぐ警察に行きました。でも実は今高齢者の万引きがとても多いんですね。だから警察も、もう見たときから、「おまえか、おまえか、おまえか」って怒鳴って帰ってきたそうです。

だからそういう状態で、私も実は民生委員やっていますけれども、相談もほとんど生活費の相談です。知事さん、もう御存じだと思いますけれども、この東伊豆の生活保護者20%近くいるんですよ。本当に雇用がもうちょっと生まれれば元気な、私も元気です、働きた



と思います。働かせてもらいたい。でも雇ってもらえない、こういった状態を何とかなくしていただければ、万引きもきつとなくなると思います。100 円のパン、200 円のラーメンか何かを盗ったそうなんですけれども、そういった人が今増えてきてますよ。

静岡県は住みよい県の第8位にランクされています。でもやっぱりそういった人がたくさんいるということも静岡県は考えていただきたいし、本当に観光の活性化をまず第1に考えてください。伊豆新世紀創造祭があったのは、もう十何年前ですけれども、県がこの伊豆半島を応援してくれているんだなというのがわかりましたけど、今全然伝わってきません。私たち「県の仕事はなあに？」と言いたくなるぐらい、県がこういうことをしてくれているという話が伝わってきません。やっぱり県民、あるいは市民に、県もこうやって応援してくれているからということをお知らせするようなイベント、あるいはPR、ぜひやっていただきたい。

もう聞いたように、各団体ボランティアさんたち、みんな一生懸命やっていますよ、ホテルも。私は主婦でホテルや商店街にも関係ありませんけど、本当皆さん一生懸命やっています。でもお客様が来ないことには何にもできない。ぜひ観光の活性化に県は力を入れるべきだと思います。そうしますとすべてうまくいきます。

<傍聴者1、傍聴者2に対する知事のコメント>

まず傍聴者1さん、どうもありがとうございました。東部全体を、東部といいますか、伊豆半島ですね、ここを一体的にとらえるようにしております。キーワードは健康ですね。そして長泉にがんセンターができて10年になりまして、これは日本一という評価が高まりまして、これはイギリスの雑誌で『Nature』という世界的に知られている雑誌がありますが、そこに10ページにわたって、一昨年の12月に特集されたぐらいです。

そしてそこに医療器具とか医療医薬品を作る会社が、この10年の間にものすごく来まして、2年前で、お金の話ですが、8,300億円の販売額を出したんです。日本一です。去年は9,300億円になったんです。ですから健康産業日本一、これも日本一です。恐らく今年の数字が出れば、近々の数字が出れば、それは1兆円を超えたいと思います。ですから非常に健康に力を入れているということがありますね。そしてそれは健康、すなわちウェルビーイング、非常に生きていくことがよくなるというこういうビジネスが成り立つところがここだということなんです。

ですから健康産業、健康関連産業の中に温泉も観光も入るといふそういうことでござい

ます。一体的にとらえる、病気を予防したい人、あるいは健康を増進したい人たち、そういう人たちが富士山の麓からこの伊豆半島全体、これをイメージしていただけるようにしていくということでございます。

それから傍聴者2さんから、何もしてないというふうに言われて、もう本当に恐縮しておりますけれども、大震災で観光客が激減しまして、それで特に電気が止まりましたので、冷蔵庫が使えなくなったとか、ものすごい被害が出まして、これは痛いほどよくわかっております。そのために私も含めてですけれども、こちらの皆様と御協力をしていただきましてゴーゴーキャンペーン、1泊2食付で5,500円だと。僕も連休のときに家内と一緒に来たりして、とにかく泊まって使うということが大事だというふうにして、うちの県庁の役人は失業することがないでしょう。ですからとにかく休みになったら伊豆半島に行って泊まって、そこで休むことが励ますことになると、全庁を挙げてずっとやってきているわけです。

少しずつお客様も戻ってきておられますけれども、まだ十分でないということで、大変心苦しく存じておりまして、観光というのは、今世界の人口70億人いますけれども、10億以上の人たちが動いているんです。この観光というのは平和でない行きません。戦争しているところに観光に行きませんから、ですから平和な産業なんですね。それは平和をつくる産業でもあります。ですからこれとても大切で、そうしたことができる場所というのは、そんなに日本中どこでも、あるいは世界中あるわけじゃありませんので、それに恵まれているのがこの伊豆半島、東伊豆も南伊豆も西伊豆もそれぞれの魅力があります。ですからそれは十分に承知しておりまして、もっとやれということなので、もっとやりますというふうに申し上げたいというふうに存じます。

今日はどなたも退席されなくて、それぞれの伊東、熱海の御婦人、またジェントルマンのお話を私たちと一緒に聞いていただきまして、やるべきこと、幾つか御要望をいただきました。

時間がきてしまいまして、限られた時間でございましたけれども、たっぷり2時間を費やしていただきまして本当にありがとうございました。これで閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。